

Nanjing 2014 YOUTH OLYMPIC GAMES 参加報告

国際審判員（神奈川県）隈元幸治

1 はじめに

8月16日（土）～8月21日（木）の日程で、中国・南京で開催されました、第2回ユースオリンピックに参加しましたので、ご報告いたします。

ユースオリンピックは、スポーツだけでなく、スポーツ・文化・教育が一体となったイベントを実現することを理想に掲げ、競技会と同様な重要な要素である文化・教育プログラムの様々な活動を行いオリンピックの意義を実感し、友情や相互の尊重を表現できるようにすることを目的に、第1回大会がシンガポールで開催され、今大会は第2回目の開催となります。

参加選手は、14～18歳の年齢制限があり、2013年の世界ジュニアでの上位入賞国選手（JM1×・JW1×：11、JM2－・JW2－：9）に加えて、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの大陸予選（各JM1×・JW1×：3、JM2－・JW2－：1）ボート競技の世界展開を目的とした Universality 枠(ESA, SRI, UGA, TOG)などのクルーが参加しました。

なお、日本からは、JW1×に高島選手（米子東高校）1名が参加しました。

2 大会概要

- (1) 種目 JM1×、JW1×、JM2－、JW2－の4種目
- (2) 参加クルー 1× 男子・女子とも24クルー
2－ 男子・女子とも12クルー
- (3) 会場 南京市 玄武湖公園（南京水上学校）コース（1000m）

3 大会日程

- 8月16日 開会式
- 8月17日 JM1×・JW1× 予選、JM2－・JW2－ 予選の組み合わせレース
- 8月18日 JM1×・JW1× 敗者復活、JM2－・JW2－ 予選
- 8月19日 JM1×・JW1× 準決勝、JM2－・JW2－ 敗者復活
- 8月20日 JM1×・JW1×・JM2－・JW2－ 順位決定、決勝
- 8月21日（予備日） 参加クルー全員による International Sprint Relay

4 参加審判員

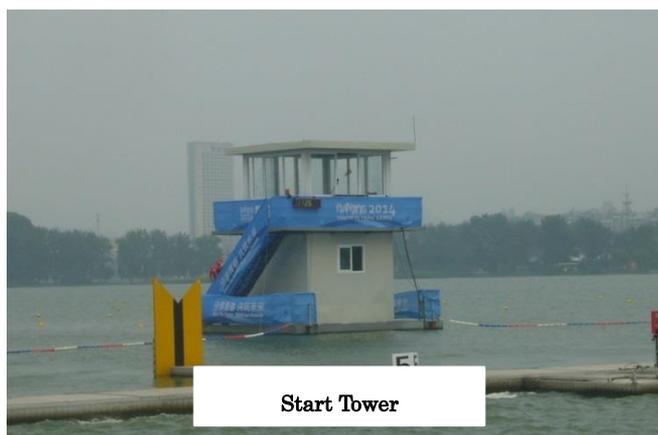
FISA 審判長の Patrick ROMBAUT、審判委員の Kris GRUDT(USA)、Jerome MOULY(FRA)、Stefanie PALFNER(GER)の3名に加えて、次の15名が参加

| | |
|--------------------------|------------|
| STEVENS Gwenda | (BEL) 1463 |
| MIRANDA Gabriela | (BRA) 1510 |
| SAGE Debbie | (CAN) 1609 |
| XU Gaohang | (CHN) 1506 |
| JANKU Zdenek | (CZE) 1145 |
| COPIE Marie-Laurence | (FRA) 1481 |
| ANTON Christopher | (GBR) 1568 |
| GREINER Thomas | (GER) 1473 |
| PARAGIANNIS Konstantinos | (GRE) 1205 |
| VIRRARI Vincenzo | (ITA) 1256 |
| KUMAMOTO Koji | (JPN) 1371 |
| HAMMAMI Ines | (TUN) 1527 |
| DERMAN Etem | (TUR) 1419 |
| VAJDA Nikola | (USA) 1193 |

5 会場施設

南京市中心部の玄武湖湖畔にある南京市水上運動学校の施設や水域（コース）を使用して大会が実施された。レースは前回のシンガポールと同様に 1000mで行われた。

主な施設・設備は次の写真のとおり。





Aligner Display



ステッキボード



出艇棧橋



帰艇棧橋



FISA 本部・判定所



Photo Finish Camera (2台)



Finish Line

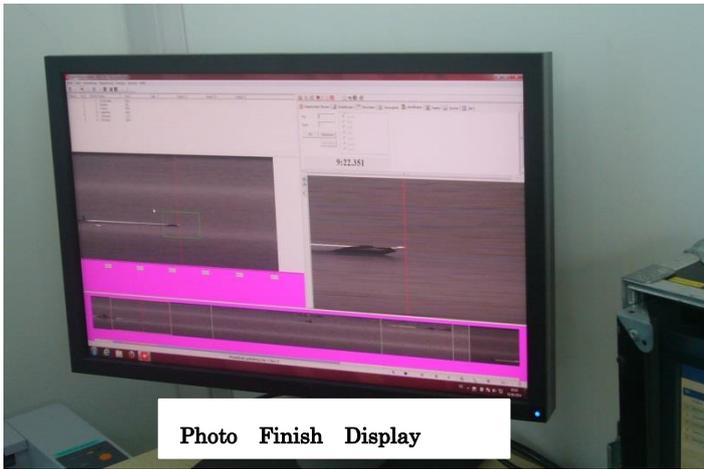


Photo Finish Display



Result Display



VIPスタンド



一般スタンド



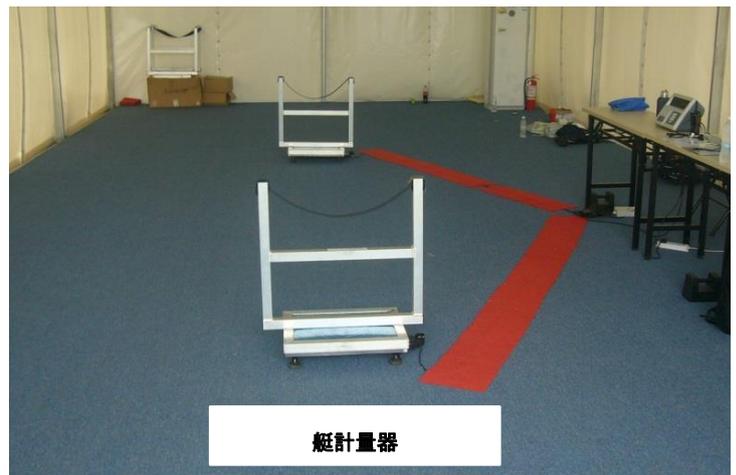
スタンド・メディア・審判控室他



主審艇



艇計量所 (仮設)



艇計量器

6 レースにおける事項

(1) レース使用艇

通常、国際大会は自艇やレンタル艇で行われるが、今大会は組織委員会がすべて用意した艇による配艇方式で実施され、艇はすべて SWIFT RACING 製が使用されていた。

また、艇の収容ラックが参加国別に設置されており、構造はパイプ組立の簡易なものであった。



(2) レース運営

J M 2 - ・ J W 2 - のレースは、1 2 艇の参加であり、大会初日には予選に先立ち、予選の組み合わせのためのレースが行われた。

レースは毎日、10:00 スタートで、10 分間隔にスタートし、概ね 12:00 終了。最終レースのスタート 30 分後にチームマネージャーミーティングが開催され、クルーへの注意事項や情報伝達が行われた。



(3) 主審艇、救助艇

1000mのレースであることから、4艇の主審艇が 0m、100m、450m、750mに配置され、レースにあたった。救助艇はゴムボート製で、2名が乗艇し、J M 1 × の北朝鮮クルーのレース中、沈の対応には、迅速な救助を行った。

(4) 艇の位置揃えと発艇方法（信号方式）

①ステッキボードのウォーターマンが艇を固定
②「Two Minutes」の号令後、線審がスタートライン後方に各艇がいることを確認し、発艇と線審のホットラインで「Line is clear」の合図を発艇に告げる

③合図を受け、発艇が「Raising Start System」と発し、スタートラインに揃えるためのシステムを作動させ、ウォーターマンが艇をホルダーに押し出す

④ホルダーへの挿入状況を確認し、揃ったら、線審が白ランプを点灯

⑤白ランプ点灯を確認し、定刻に合わせて、発艇がロールコール、アテンション、赤ボ



タン、青ボタンでスタートさせる

なお、線審はスタートシステムと連動した **Aligner Display** (フリーズ画像) を確認し、フライングがあった場合には、直接、フライングボタンを押して、ブザーと信号の点滅により、レースを中止させる。

(5) ウォームアップ、クールダウンエリア

各エリアは、コース沿いに設定され、それぞれのエリアを囲むように、スイミングロープが設置され、艇の接触を防止する対策が取られていた。

7 担当部署

5日間における部署配置は次のとおり。

| | |
|-------------------------------------|----------|
| 8月17日(日) 予選 | 主審2 |
| 8月18日(月) 予選・敗復 | 監視(帰艇棧橋) |
| 8月19日(火) 準決勝 | 線審 |
| 8月20日(水) 決勝、順位決定 | 監視(出艇棧橋) |
| 8月21日(木) International Sprint Relay | 主審1 |

最終日には、**Thomas BACH IOC** 会長がボート会場を訪れ、レースの観戦、選手・役員・ボランティアへの激励が行われました。監視部署で審判業務を行っていた私たちも、直接、お会いすることができ、**Patrick ROMBAUT FISA** 審判長から紹介いただきました。



8 日本選手の成績

日本は2013年のアジアジュニアで JW1x の出場枠を獲得し、2014年ジャパージュニア1位の高島選手(鳥取・米子東高校2年)が日本代表として、菅原コーチ(神奈川・津久井高校教諭)とともに参加し、惜しくも成績は19位でしたが、4年に1回という貴重な大会を経験できたと考えます。今後の高島選手の活躍を期待します。

9 International Sprint Relay

大会は荒天候によるレース中止を想定して予備日が設けられている。順調にレースが実施されたことから、予備日には **International Sprint Relay** が実施された。

これは、大会参加すべてのクルーが大会の成績をもとに、12チームに、概ね均等なレベルとなるようにグループ分けされて、チーム戦として実施された。

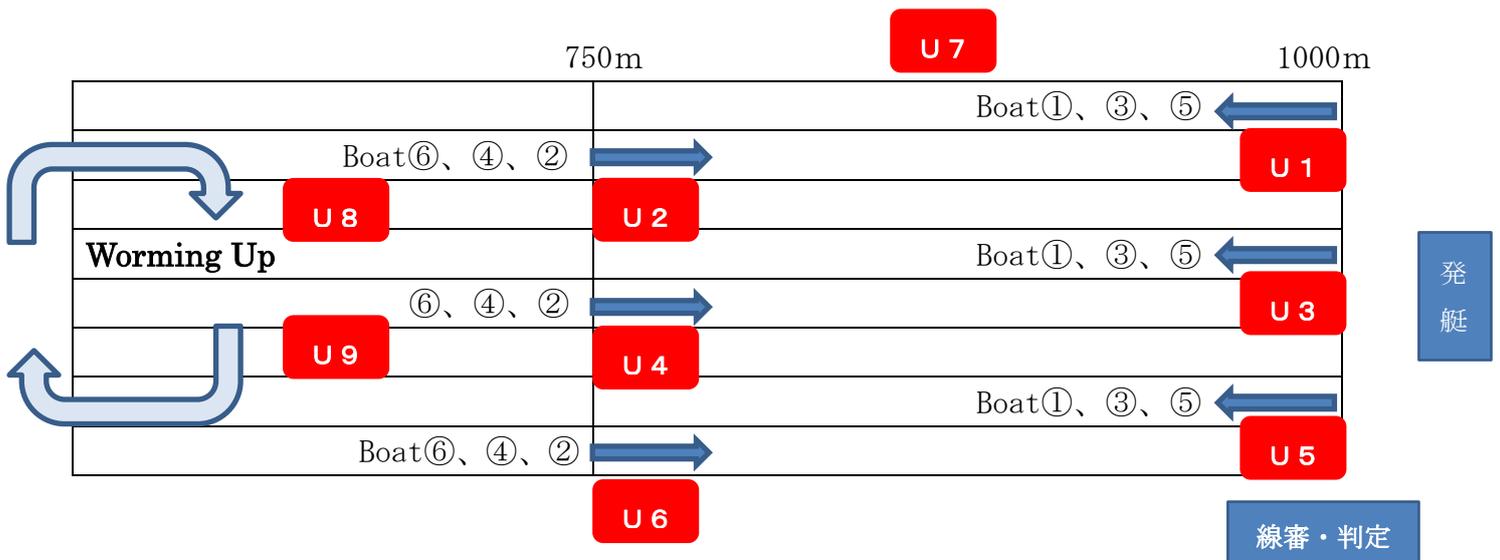
1チームは、JM1×(2)、JW1×(2)、JM2-(1)、JW2-(1)の6クルー(Boat①~Boat⑥)で構成。

1レースは3チームで行われ、予選4レースが行われ、その結果(タイム)をもとに決勝4レースの組み合わせが決定され、それぞれのレースでの第1位と予選・決勝のベストタイムのチームが表彰される。

レースは250mで行われ、1000mからそれぞれの①クルーがスターターの号令でスタートし、750m地点通過で、②クルーにRelayして、③→④→⑤とつなぎ、⑥がゴールした時点でレース終了。なお、①と⑥は必ず2-とする

1000m (Start, Relay, Finish) ①、③、⑤

750m (Relay) ②、④、⑥



このレースにおける各審判部署の役割は以下のとおり。

発艇：通常の旗による発艇、(Boat①のスタート、クイックスタート)

線審・判定：①クルーへスタート位置への揃えをメガホンで指示、揃った時点で白旗掲示、⑥のクルーがゴールした時点で着順判定

U1~U6：スタート時、Relay時のフライング判定、②~⑥Relay時、手を挙げてGOの号令をかける。

※フライングがあった場合

軽微な場合：白旗を掲示して「Penalty 5seconds」をクルーに伝達

大きな場合：対象ボートを一時的に止めて、その後再スタートさせる。

なお、レース後、タイム加算のペナルティがあるときは審判長に連絡

U7：レース全般を総括

U 8、U 9：次のレースクルーの待機指示等

このレースは私自身、初めての経験であったが、2010年第1回大会でも実施されたようで、スピード感のある大変、エキサイティングなレースが行われ、参加クルーの国際交にも寄与したと思う。

10 2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて

2020年東京ピックオリンピック・パラリンピック開催に向けて、本大会に参加して、今後の参考となる点をご紹介します。

まず、ボランティアの活動です。

本大会を支えるボランティアとして、約20,000人の大学生が競技会場、トランスポート、式典、セキュリティ等、様々な場所・業務で積極的な活動を行うとともに、国際交流を行っていました。街中に支給されたユニフォームを着た人々があふれ、街全体で大会を盛り上げている印象を受けました。

英語をはじめ、様々な国の言葉を話せるボランティアの確保・育成は、喫緊の課題と考えます。すでに、アジアカップIを開催し、その取組はすでにJARAでも開始されています。大会組織委員会と連携した対応により、取組拡大を図る必要があります。

トランスポートでのサポートですが、今回、成田空港から上海経由で南京空港に入りました。上海空港に到着飛行機を降りたところに、航空会社係員がネームカードを掲示して待機していました。私は、その係員のアテンドにより、迅速かつ円滑に入国から国内線ターミナルの移動、搭乗までのサポートを受けることができました。これは、帰国時も同様でした。

また、南京空港からホテルまでのトランスポートも専用デスクが設置され、大学生ボランティアにより、各宿泊先へ送迎対応が行われていました。

また、ホスピタリティですが、発行されたAD(アクレディテーションカード)を所持し、掲示することにより、選手・役員・ボランティアは地下鉄等の公共交通機関や博物館が無料で利用できました。

これらのサービスは、開催都市を訪れた多くの選手・役員には、積極的に観光に出かけるきっかけとなり、また、ボランティアを確保するためのインセンティブになるとおもわれますので、組織委員会や東京都への働きかけが必要と思います。

11 おわりに

2020年東京オリンピック・パラリンピックを控え、日本ボート協会においてはメダル獲得に向けた選手強化と合わせて国際大会の開催運営力の強化が求められています。

今年5月には、国内で久々の国際大会となるアジアカップIが開催されましたが、これから2020年までに多くの国際大会を開催することになるとともに、毎年アジアカップなどの国際大会を開催するなど、ARF加盟国のリーダー国としての役割を果たしていくことが求められています。

国際大会の運営には、競技・審判としても、それらに対応できる体制づくりと人材育成が

急務であり、本報告がそれらに資する情報共有の一助となれば幸いです。

今回の参加にあたり、ご支援をいただききました、日本ボート協会木村理事長、相浦事務局長、相葉事務局次長、千田国際委員長、上野審判委員長の皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。